

# 未来医療への懸け橋

市大先端研究

■20■



大橋健一  
教授



サンプルの採取は病理診断科の医師によって行われている

横浜市立大学先端医学研究センターのバイオバンクは2006年10月に設立された。バイオバンクは病院に入院している患者から採取された組織や血液などのサンプルを同意の上で中央に集め、保管、管理し、研究者に効率よく提供していくシステムだ。

現在、2千例以上のがん組織、正常組織検体を保管。集まつたサンプルは学内の臨床、基礎研究室ばかりでなく、共同研究を通して学外の研究機関、企業の研究機関にも提供が可能になっている。

従来、日本では基礎医学の分野において多くの国際的な成果が挙げられてきたが、欧米に比べ臨床への応用が遅れているといわれて

いた。このため、基礎医学の研究成果を臨床現場へ橋渡しするような研究（トランスレーショナルリサーチ）の体制を強化していく必要があるが、その際、重要な役割を果たすのがバイオバンクだ。

新しい治療薬、診断のためのバイオマーカー（病気の目印となる物質）の開発には多くの患者サンプルが必要だが、個々の研究者がサンプルを集めるには大きな労力がかかる。バイオバンクの利点は、将来の研究に備えサンプルをあらかじめそろえ、必要なときに研究者に素早く提供できる点。患者の個人情報保護も万全の体制で臨んでいる。

大橋健一教授が所属する病態病理学教室では、バイオバンクを活用し、肺がんの発生、進展に関与する分子機構の解明、予後不良肺がんのメカニズムの解明、間質性肺炎を背景にした肺がんの発生機構の解明など

## バイオバンク

大橋教授は「バイオバンクによつて、研究者の労力を

(病態病理学)  
〈隔週掲載〉

# 臨床現場へ橋渡し

軽減でき、貴重なサンプルの散逸を防ぎ、共同研究が推進され、新たなイノベーション事業に発展することが期待される」としている。